



「小さいころから協調性がなく、何事もマイペースだった」と語る矢部さんは、大学3年だった1974年にヒッピーの発祥地とされるカリフォルニア・バークレーに短期留学をする。全米屈指の自由な雰囲気を持つ街で「変わり者といわれていた自分をはじめ受け入れられた」解放感、矢部青年のアメリカへの興味を一気に駆り立てた。

英語は大学の英会話サークルで身に付けた。当時は弁論サークルの全盛期。他大学との弁論大会も盛んで、

大学卒業後、旅行会社に就職するが、「日本企業は自分に向いてない」と半年で退社。片道チケットを手に再び渡米してしまう。1カ月の滞在費を払ってしまおうと残りは雀の涙に。食事に行った日本食レストランで皿洗いの仕事に就いた。そこで出会ったアルバイト仲間がエルサルバドルや中国などから移民してきた人たちだった。自由平等を標榜しているアメリカが、他国に対してはいかに酷いことをしてきたか。「日本では決して学べないことを彼らから

91年に出版した、バブル期に米国へ進出した日本企業の内幕を暴いた『日本企業は差別する！』（ダイヤモンド社）が大きな反響を呼び、フリーとして独立するに至った。

20代の日々は「生産的なことはなにもせず、遊んではかりだった」と苦笑する。「人生は三十から。そういう時期もあったから、今めいつぱい仕事に打ち込むことができるんです」。いたずらっぽく笑う矢部さんの言葉には妙な説得力があった。

あくまで日本を拠点にアメリカの

独自の精力によるフリーランスの矢部武氏（昭和53年商学科卒）。扱ったテーマは教育・人種問題からCIAまで多岐に及び、独自の切り口でのアメリカレポートには定評がある。「セカンドチャンスを与える国アメリカ」（共同通信社）、「テロ後のアメリカいま“自由”が崩壊する」（KKベストセラーズ）など著書は多数。「東洋大学で身につけた英語を武器に、アメリカで人生をやり直した」という矢部氏について聞いた。

聴衆には女子学生の姿も。「元来、議論好きで目立ちたがり屋。いいところを見せたい一心で念入りに下調べをし、演説の練習に励んだ」。これが後々の語学力・取材力の下地となった。「英会話学校のような受け身の姿勢では決して身に付かなかつたでしょうね」。マイペースぶりはいかかわらず、サークルはクビになりかけた。しかし後年、当時のサークルの先輩が就職した大手企業から英会話の講師に迎えられたときは、内心「やった!」と叫んだとか。

学びました」。様々な疑問や興味が芽生えたこの時期が、ジャーナリストとしての原点と位置付ける。その後、「ぶらぶらしているのも飽きて、現地の大学でマアケテイングの修士号を取得する。在米期間は7年以上に及んだ。

帰国後はPR会社に就職し、2年間企業の広報活動に従事するうちに「本当に自分がやりたいものが見えてきた」。三十歳目前になっていた。

その後、英会話教師、ロサンゼルス・タイムズ東京支局記者を経て、

現在をレポートし続ける。日本での反応を肌で感じる事ができるのが強みだ。在米ジャーナリストは数多いが、米国滞在が長過ぎると今度は日本人の視点や関心から離れていってしまう。それが気がかりなのだ。

矢部さんは「仕事が心底楽しい」と語る。異文化の違いを際立たせ、違いを楽しむうちに最後に共通点が見えてくる。そこに国際派ジャーナリストの醍醐味がある。「自分の価値観や好奇心がない人は、この仕事はつまらないと思います」。後輩に

は、「自分の興味にとことんこだわって自分なりの価値観を追求してほしい。場所、機会はこれからゆつくり探せばいい」。だめでもともとじゃないですか、と。

米国では人種や民族など様々な立場から意見の異なる人がいるが、議論がぶつかっても必ずその横には応援してくれる人がいる。人それぞれ異なる考え方を分かち合う。この価値観や考え方の多様性がアメリカの魅力だ。「日本とは比べものにならない深刻な問題を抱えているのに、それに真つ向から立ち向かい、現実的で合理的な解決策を次々に打ち出してくる。これで、私もいつの間にかエネルギーをもらってしまふ」。

最近では、日本企業も個人的な人材を求めているといわれるが、「日本は個性を認め、ても、応援するには至っていない。積極的に違いを楽しむようにならない」と苦言を呈する。

30年近く米国とつきあってきたその愛情ゆえに、『9・11』以降のアメリカの傲慢さと単独行動主義ぶりには恥ずかしさを覚える。目下、ユーモアと皮肉を交えて「ナンパワンで、タフで強くて正しくなければ」という米国人特有の強迫観念と米国の傲慢さとの関係を描いた『アメリカ病』を執筆中という（5月に新潮新書から刊行予定）。

矢部さんにとってはアメリカが人生のターニングポイントとなった。あなたにとっては、何が転機となるだろうか。